

同志社大学
2018 年度卒業論文

議題 笑いの理論の証明と追究

学籍番号 19151083

氏名 吉田拓広

指導教員名 立木茂雄

(本文の総字数 25034)

要旨

議題：笑いの理論の証明と追究

学籍番号 19151083

氏名 吉田拓広

笑いはコミュニケーションの上で大きな役割を果たすほどの社会的価値を備えている。人を楽しませる、愉快にさせる笑いが生まれる要因と特徴に興味を持った。先行研究ではユーモアの定義を明らかにしたあと、これまでに笑いの発生要因に関して唱えられてきた3つの代表的な理論を用いた。しかしこれらの理論が現代にどれだけ通用するものか、さらなる特徴の有無は未だあいまいである。20代の大学生を対象に、周囲の人が何を面白いと思っているのか、そしてその仕組みを聞き出すためのインタビュー調査を行なった。そのインタビュー内容を文字起こししたものを分類すると、3つの理論は未だに通用するが、理論が生まれた当時とは形態が変わっていたこと、笑う人の受けてきた地域文化の影響と関係があることがわかった。笑いはどのような変化を遂げて来たのか、現代に通用する笑いのメカニズムの正体を明らかにした。

キーワード：ユーモア，笑いの理論，地域文化

目次

1. はじめに	3
2. 先行研究	3
2.1 ユーモア的笑い, 非ユーモア的笑い	3
2.2 ジョン・モリオールの3つの理論	5
(1)「優越の理論」	5
(2)「ズレの理論」	6
(3)「放出の理論」	7
2.3 笑いというものに起こる地域差	9
2.4 リサーチクエスション	9
3. 方法	10
3.1 一度目の調査	10
3.2 リサーチクエスションの変更	10
3.3 二度目の調査	11
3.4 質問事項	12
4. 結果と考察	13
4.1 分析方法	13
4.2 考察	14
(1)「優越の理論」に関するもの	14
(2)「ズレの理論」に関するもの	16
(3)「放出の理論」に関するもの	19
(4)「3つの理論のどれにも当てはまらないもの」	20
5. 結論	22
5.1 まとめ	22
5.2 今後の課題	22
〈注釈〉	23
〈参考文献〉	23

1. はじめに

私たちの生きる日常生活の中で笑うという行為は一人だろうと複数人だろうとごく普通に行われており、それはコミュニケーションを促進させる一つの要素と言っても過言ではない。そしてそれらは必ずと言っていいほど対象物、対象者がいて初めて成り立つ行為である。その対象の中で何かかわれわれを面白いと感じさせることが発生するために、面白いという感情がゆえに笑うのである。笑うという行為自体は、笑っているあいだは、笑いに集中させ、他に何も考えさせない、つまり雑念を思い浮かばせないという効果がある。そのことがゆえに、笑うことによって、先にあった固定観念から、一時的にせよ解放される。その解放がゆとりをもたらし、バイソシエーションを可能にし、創造性に寄与すると考えられる。面白い創造性を帯びたものを対象にした笑い以外にも笑いは存在する。誰かに対して優越感、支配感を抱き見下すように笑う〈嘲笑〉、面白くも無いのに、無理やり笑って、場の雰囲気を保つ〈苦笑い〉、その場の雰囲気を保つために、笑いを無理に作る〈つくり笑い〉、接客業などで用いられる〈微笑み〉や何かを思い出して発生する〈思い出し笑い〉など、それらは日常生活においてありふれて存在している。その中でもユーモアを含んだ喜劇的で愉快的な感情を伴ったものは多くの人に親しまれ、今日ではバラエティ番組でのやり取りが動画としてTwitterにアップされることも決して珍しくない時代になっている。先日放送された『M-1 グランプリ 2018』(ABC・テレビ朝日系)¹⁾の平均視聴率は関東地区 17.8%、関西地区 28.2%、瞬間最高視聴率は関東地区 22.3%、関西地区 37.6%と、驚くべき数字であった。これだけユーモア的笑いの需要が高まる一方で、現代において笑いのメカニズム、どのような時に笑いは起こるのかについての調査はあまりされていない。古代に提唱された笑いの理論は存在するが、それらが果たして現代も用いられているものなのかは不明である。また、〈お笑い〉という文化も大阪が発祥の地であるという事こそ知られてはいるが、関西と関西以外で見られる笑いの特徴を明らかにした調査も少なく、笑いの理論と関連付けた調査はされていない。本稿では現代に通用する笑いのメカニズムについての理論と、それらに見られる地域文化との関係を明らかにするためにインタビュー調査を行なった。

2. 先行研究

本稿では〈ユーモア的笑い〉〈非ユーモア的笑い〉という言葉が多く登場する。そのため読者の方々にはあらかじめその違いを理解してもらう必要がある。ユーモア、非ユーモアと笑いの関係を説明したあと、それらの笑いに関して過去に提唱されてきた理論をまとめる。

2.1 ユーモア的笑い、非ユーモア的笑い

そもそもユーモアとは一体何なのか。『オックスフォード英語辞典』(オックスフォード大学出版局 1928=2010)ではユーモアについてこう書かれている。

a 動作・発話・文章に備わり愉快的感情を引き起こす性質。おかしさ、滑稽味、おどけた様子、ひょうきんさ、楽しさ。

b おかしなものや楽しいものを知覚する能力、または、それを発話、文章その他の作品で表現する能力。

『アメリカン・ヘリテージ辞書』(American Heritage Publishing Company 1969=2018)では、「あるものをおかしいもの、または愉快的なものにする性質、おもしろさ」と提案している。片岡宏仁(2015)によると、ここには小規模な循環がある。「ユーモア」から「おもしろい」と「愉快」へ、そして「笑いを引き起こすもの」へと進み、次に「笑い」を辞書で引いてみると、今度は「あるものがおもしろかったり愉快だったりひょうきんだったりする時になされる感情表現」とある。ユーモアは笑いを引き起こし、ユーモアはわれわれが笑うモノの「性質」であるという、一見すると自明なことであるがこれには深刻なまでに手直しが必要である。つまり、確かにユーモアは笑いを伴うことが多いが、笑いはいつでもユーモアの結果とは限らない。ユーモアの定義は非常に難しく、数多くの学者が批判を行ってきた。

『ユーモア社会をもとめて』(John Morreall 1983=1995)ではユーモア的な笑いとは非ユーモア的な笑いの事例を挙げている。

表1 ユーモア的な笑いとは非ユーモア的な笑い

ユーモア的な笑いの場面
<ul style="list-style-type: none">・ジョークを聞く・ダジャレを聞く・誰かがいたずらされるのを見る・変わった服装をしている人を見る・よく似た服装をした成人の双子を見る・誰かが不運な目にあうのを見る・鋭いツッコミを聞く・子供が正確に大人の言葉づかいをするのを見る・滑稽な気分になってほとんど何にでも笑ってしまう
非ユーモア的な笑い
<ul style="list-style-type: none">・くすぐり・いないいないバアをされた赤ちゃん・放り上げて受け止められた時の赤ちゃん・手品を見る・危険な状態にあったあと安全な状態にもどる・問題やパズルを解く・競技やゲームに勝つ・街で旧友に偶然出くわす・くじに当たったことを知る

モリオールは概念的転位から生じる笑いを「ユーモア的な笑い」、さまざまな種類の感情的

転位から生じる「非ユーモア的笑い」と区別した。ユーモア的笑いとはあとに記載する「ズレの理論」がまさにそのものである。非ユーモア的笑いとは比較的単純な事例、危険な目にあったのちに安全を取り戻すことで生じる笑いの検討から理解できる。はじめ転びそうになっていることを認識した人は、そのあとバランスを取り戻した時にもはや自分が危険な状態にないことを認識する。ここで彼を笑いに導くのは、恐怖感を含んだ緊張から緊張の取れた安心感へという、感情の変化であり、転位なのだ。パズルや問題を解くことで生じる笑いの背後にも、同種の感情的転位が存在する。もし比較的小さな努力で簡単に問題が解けてしまったら、人は笑わないだろう。だが問題が容易に解けず、緊張と落胆を経験する場合、おそらく人は解決策を発見した時に、一つの感情的転位を経験するであろう。この感情的転位は快と感じられ、そこで人は笑うのである。運動競技あるいはゲームに勝つことも、もしそれが人によって真の苦闘であったならば、同様にして笑いをもたらすであろう。この笑いをもたらす転位はいつでも否定的な感情状態から肯定的な感情状態への転位でなければならない、というわけではない。たとえば、街で偶然旧友に出くわすという状況においては、その前に何も感情を経験していないかもしれない。だが、その次に、友人の顔を見つけ、彼に近づこうとして駆け出すとき、興奮の高まりを覚える。ここに生じる、特に感情を感じるののない状態から非常に強い感情を感じている状態への転位は、気分のよいものであり、笑いが快感の表現となるであろう。同様に、自分が宝くじに当たったことを知ることも、その発見が偶然であり、たいそう突然なものである場合には特に、笑いをもたらすであろう。われわれが何か楽しい行為を心待ちにしたり、何か特にお気に入りの記憶を思い起こしたりして笑うように、感情中立的状態から、単に肯定的な感情を喚起する何事かを考えることへの転位も、往々にして笑いを引き起こすに十分である。

2.2 モリオールの3つの理論

数々の笑いのメカニズムにおける理論を提唱してきた学者たちの文献を参考にし、モリオールは笑いにおける理論を大きく3つに分けて提唱した。以下はそれらの理論の内容と、その理論が生まれた経緯、そしてその理論が笑いの包括的理論になり得ない理由をまとめたものである。

(1) 「優越の理論」

最も古く、また現在も最も広く知れ渡っている笑いの理論に、笑いは他人に対する優越感の表現だと考えるものがある。この考えは、かつてのプラトン(Plato =1993)の、笑うにふさわしい対象は人間の悪や愚行であるという考えに起因する。彼によれば、他人を滑稽なものに仕立て上げるのは自分自身に対する無知であり、笑うべき人間とは、自分のことを現実の自分よりも、金持ちで、見栄えが良く、徳に富み、知恵ある者とする人間である。プラトンは、笑うという行為は対象への悪徳の意を含んだ、侮辱の一形態と論じた。この意見にはアリストテレス(Aristotle =1988)も賛成しており、悪しきものに関わって起こるのが笑いであるがゆえに、笑いすぎる人間が善い人生を歩むことは無い、と主張している。しかし、だからといってアリストテレスはユーモラスな笑い、態度を全否定しているわけではなく、そこに節度を求める姿勢であったが、それは理想でしかなく、当時は存在しないものであった。プラトンやアリストテレス同様、ホッブズも笑いに対し「他人の弱点あるいは以前の自分と比較することによって、自己のうちの何らかの卓越性を何ら

かの形で認識することから生じる突然の大得意、つまり自画自賛である」(1969)という考えを述べている。そしてアンソニー・ルドヴィッチ(Anthony Rudovitchi =1995)は「突然の大得意」というホブズ理論の進化版を提案した。彼によれば、笑いとは全て何かある特定の状況、あるいは自己の環境全般に対する「優越せる適応」感情の表現である。笑いは固有の身体形式として歯をむき出しにするという形をとるが、それはもともと笑いが敵に対する身体的な挑戦あるいは威嚇だったからである。笑う時に歯を見せるのは、犬の攻撃行動においてそうであるように、身体的力量を自己主張するための一方法である。われわれが歯を見せながら笑うのは、自分が強く、敵よりも状況によく適応していることを敵に伝えるための方法である、とルドヴィッチは言う。優越の理論がこのような特徴を持つ理由は、今日と非常に異なった社会条件において生まれたことにおける。

モリオールが言うには、昔、多くのユーモアが粗野なものであったことが、今では知られている。それほど啓蒙されていない時代において、他人が苦しむのを見るのは大きな喜びだった。古代アテネと現代社会との相違は、ヒエラルキーのある社会秩序と平等性のある社会秩序の違いではない。それはヒエラルキーが明確な社会と、社会が平等であるかのようにはヒエラルキーが現れなければならない社会の相違である。古代アテネでは、自由民のエリートは大衆の無教養な振る舞いを見下すのに戸惑いを感じなかった。しかし今日では、不平等な条件での平等という価値が、イデオロギー的なジレンマを生じさせている。非公式なコードが公的な生活にしみ渡っている。今日では手下の身分に命令を下す際にも、丁寧さという複雑な規範を伴う必要がある。

これらの、優越の理論が生まれた当時と今日の環境の違いから、優越の理論が現代に通用するものなのかどうかは未だ明確にはされておらず、ホブズ以降の時代を生きた作家たちは、彼のモデルに合いそうにないユーモアの例を出し、笑うとき優越感を得る経験を個人的にはしないと断言し、ホブズを否定した。こうした批判者の意見は、笑いの経験というものは回りくどいものではないし、そのようであるべきだという意味を込めている点で、非常に現代的である。自分の笑いが、ホブズが暴いたと主張した残酷で不愛想な優越感に基づいているのを認めようとする者はほとんどいないだろう。モリオールもこの優越の理論は普遍的なものでないことを認めており、理由として実際に優越感や自己評価無しに、単なる対象物の存在から伺える滑稽さや、われわれの中での常識とのズレを確認し、自己肯定の意を含んだ突発的で愉快を求める笑いがあることを述べた。そこで登場するのが「ズレの理論」である。

(2) 「ズレの理論」

この理論は笑いの情緒的、感情的側面ではなく認知的、思考的側面の理解を伴って生まれる。自己の優越感、勝利感といった感情的なものであった優越論に対してズレの理論にとっての笑いとは、予期されざる、非論理的な、また他の何らかの意味で不適切な何事かに対する知的反応である。この理論の背景にある基本的な考えは、大変一般的で極めて単純なものである。すなわち、われわれは秩序だった世界に生きており、そこでわれわれは、事物やその特性や出来事のあいだには一定のパターン、常識が存在すると予期するようになっていく。そうしたパターンや常識に合致しない何事かを経験するとき、われわれは笑う。パスカルは「予期したことと実際に見ることのあいだに生じる驚くべき不釣り合い

上に、笑いを生み出すものは何もない」(=1988)という。この理論に最初のヒントをあたえたのはアリストテレスであり、彼は『修辞学』(=1989)において笑いの源泉としてのズレに気付く、話し手が笑いを取る1つの方法は、聞き手に一定の予期を抱かせておいて、次に彼らの予期しなかった何かで面くらわせることだと指摘している(1995)。18, 19世紀にこの理論を提唱したショーペンハウアー(1995)は、笑いの起きる際にはいつでも概念(もともとの性質からして一般的であり、それぞれに個性をもった個別の事物を、それらがあたかもその概念の全く相等しい具体化であるかのごとく、ひとまとめにしてしまうものである)とそれら事物自体とのズレが存在するはずだ、と論じる。

モリオールによると、18世紀のイギリスのズレ理論家たちは、ホップズとは異なった政治状況に生きてきており、その大きなきっかけは、1688年の名誉革命であったという。名誉革命をきっかけにして生まれたロックの民主的哲学は、ホップズの時代の、絶え間ない厳格な懲罰を必要とし、危険で利己的な情念によって動かされていた人間像を大きく変えた。人間は感覚から明確な概念を受け取る、世界の知覚者とされた。変わったのは人間像と政治だけでなく、中流、上流階級の人々の生活も同様に物質的に変わった。世界貿易によるコーヒー、チョコレートの輸入は社会生活に大きな影響を与えた。大都市の中心部にはコーヒーハウスやココアハウスが建てられ、紳士たちが集まり、新しい飲み物を飲み、芸術や貿易や政治について気持ちよく語る場となった。そこで問題になったのが紳士たちだけでなく、社交的に振る舞う淑女、いわゆる育ちの良い貴族が抱いたジレンマであった。真面目に見えながらも、真剣過ぎず、陽気な会話を可能にするために求められたのは、心地よいユーモアであった。ここからズレ理論は生まれた。(=1995)

ズレ理論の基本的なアイディアは、二つの異なった観念が突然つながると滑稽な効果を生むということだった。この時代から笑いに社交性が望まれ始め、望ましくない感情を含む優越の理論を排除する動きがあったが、軽蔑の意を含む笑いは少なからず存在すること、ズレの理論で説明するには限界がある笑いが存在することを理由に、2つの理論は交わることなく提唱され続けた。確かにズレはあらゆるユーモア的笑いに含まれているが、多くの非ユーモア的笑いには含まれていない。したがってズレの理論を笑いの一般理論とすることは難しいのだ。

(3)「放出の理論」

優越の理論は笑いに含まれる情動に焦点をあて、ズレの理論は笑いを引き起こす対象や観念に焦点をあてるが、放出の理論は、これら他の二つの理論ではほとんど論じられることのない問題に関心を集中する。主に提唱した人物はハーバード・スペンサー(Herbert Spencer 1855=1995)とフロイト(Freud 1906=1966)である。スペンサーによれば、笑いにおける筋肉の運動は何らかの感情と結びついたより大きな運動の初期段階ではないという点で、笑いは感情的エネルギーの通常の発散形態とは異なっている。腹を立ててこぶしを握ったり、地団駄を踏んだりすることはいくらかの神経エネルギーを解消するが、怒りが増大した場合にはそうした運動は物理的攻撃の運動へと切り替わる。しかしながら笑いの筋肉運動は他のいかなる運動にも人を導くことが無い。彼によれば、感情が蓄積されながらも、その次にそれが見当違いなものだとみなされるようになるとき、笑いによるエネルギーの発散が達成される。モリオールはこのスペンサーの笑い理論を部分的に認めており、

ある種の笑いと言張の解除あるいはエネルギーの放出との間には明らかに密接な関係があるとした。転んだりして危険な状況に陥ったあと、安全な状態を取り戻して笑った、という誰でもしたことのある経験はこの理論によって説明できる類の笑いだ。ユーモアとは高まりすぎた神経の興奮を解放する形式、とするのがこの理論の特徴である。思考により緊張が次第に高まっていって、この緊張がさらなる思考がもたらした肯定的な感情によって解放されたとき、そのエネルギーが笑いに変形するというものである。たとえば、1人の男子生徒が自分の先生を毛嫌いしている場合、彼は先生に暴力をふるうことによって自分の嫌悪感を発散させることは許されない。実際彼は、敵意を抑圧しつつ、教室の中では先生に対する敬意や従順さの見せかけさえつくろうであろう。しかしながら、その先生が誰かに殴られたりしたら、たとえば先生が誰かに襲われたことをその生徒が耳にする場合でもよかろう、あるいは先生が教室の前のほうで滑って転んだりしたら、生徒の嫌悪感の蓄積したエネルギーは笑いになって発散されるだろう。この例を読んでわかる通りこの理論は非ユーモア的な笑いにも当てはまる。

しかし、この理論の問題点は、突然余剰のものとなった感情という概念が、感情の蓄積が存在するある種の事例に当てはまらないように思われることであるとモリオールは指摘している。つまりそれは刺激の結果として生じるものがわれわれの期待していたものであり、蓄積されてきた感情がその場にふさわしい場合である。たとえば、自分の中で好ましくない人間に、爆竹入りのタバコを献上しようとして彼に歩み寄る場合、彼に接触する前からすでに興奮は高まり始める。そして彼にタバコを手渡し、彼がそれを受け取り、火をつけるという進行につれて、興奮はますます高まる。ついにタバコが彼の顔めがけて爆発する時、われわれは腹の底から笑うわけだが、それはわれわれのうちに蓄積されてきた攻撃感情が突然見当外れのものになるからではない。笑い刺激の帰結には必ず「急降下するズレ」が含まれているとするスペンサー(=1995)の理論にとって、この種の笑いは特に厄介である。「急降下するズレ」とはつまり、笑う時われわれの感情は強い感情から弱い感情へと必ず変化し、その結果として生じる余剰が笑いのうちに放出されるだろう、ということである。このスペンサーの理論に言及した上でフロイト(=1995)は「機知の笑い」という彼なりの放出現論を唱えた。それは、日常真面目でいるときには、われわれは自分の性的または攻撃的な思念や感情を抑圧するために心理的エネルギーを使っている。だが機知においてわれわれは、それらを抑圧し続けるのではなく、そうして思念に注意を向け感情を表現することができる。その時、通常は禁止のために使われているエネルギーが突然余剰のものとなり、したがってそれは節約され、そのエネルギーは笑いのうちに放出されるというものだ。

フロイトがスペンサーと異なっている点は、スペンサーの場合、突然余剰のものとなるのはすでに喚起されている何らかの感情エネルギーであったが、一方フロイトにおいて余剰となり化すものは、通常は感情を抑圧するために使われているエネルギー(禁止エネルギー)である。フロイトによれば、機知の笑いの快感は、その強度において、機知によって放出される感情を抑圧するのに要したであろう努力に匹敵する。わかりやすく言い換えれば何が禁止、抑圧されている空間の中でそのルールを破った際や、崩れた際に起きる笑い、また性的ジョークがこの理論によって説明出来る。社会の中の様々な規範、約束ごとを守るために費やしている心のエネルギーを放出することにより起こる快感が笑いである、と

いう考えを持つ。しかし感情エネルギー、禁止エネルギーなど、実在の確認が難しい概念が多く用いられるために、この理論は笑いの包括的理論にはなり得ない。

2.3 笑いというものに起こる地域差

一方、笑いのメカニズムにおける理論とは別に、日本国内において、地域によって、笑いというものの捉え方が違うということ、井上宏(2003)は述べている。彼によれば、東京と大阪では笑いに対する印象に大きな違いがあるという。そしてその違いの原因は江戸時代の経済を支えた社会体制に由来するという。

当時東京は侍の社会、つまり縦社会、上下関係が厳しい社会であった。身分や階級などの縦の軸が一番大事で、この縦の序列のなかに各人の位置づけがあつて、秩序を保たれている社会では、笑いは抑制され、禁欲されていたという。なぜなら、笑いは、喧嘩のもととなるからである。誰かが笑っていると、その笑いは自分に向けられたものと受け取ってしまう。縦意識が強いために、自分の身分や格式、権威、振舞いなどに神経が敏感であり、それが笑われていると受け取りやすかったのだ。笑われるのは最も恥ずべきこと、最大の恥辱と受け取るため、笑いは危険であり、「攻撃として」受け取られてしまっていた。

対して大阪は商人の都として発展をみたため、何が大事かといえば、横の関係であった。もちろん、商いも組織でするため、縦の上下関係はあるが、商いで一番大事なのは、仕入先、得意先、お客さんとの横の関係である。横に関係を発展させ、信用を得ていくのが商いの道だった。信用は、親和的な人間関係を築いていくことで得られるわけで、商人が最も大事にするものだった。商いは命令と服従の関係で進むのではなく、対等の交渉で進められるために、関係を親和的に保ち、交渉ごとをするのに、笑いは欠かせないものであった。互いの緊張を解きあつて、角が立たないように笑いをはさみながら、関係の構築、維持、発展を心がけるので、大阪では笑いは「協調として」受け取られていたという。(井上宏 2003)

これらは歴史的観点から東京と大阪における笑いに対するイメージの違いの理由を説明したものだがこの違いは今日まで少なからず影響を及ぼしていることを、高校時代まで東京で過ごし、大学入学を機会に京都で一人暮らしを始めた著者が誰よりも体感している。

2.4 リサーチクエスチョン

以上が古代から提唱され続けている笑いの理論である。読んでいただければお分かりのように、繰り返しになるが、これらの理論は内容こそ長年にわたり調査に用いられる事はよく見かけるが、果たして現代の生活にどれだけ通用するものなのか、3つの理論で説明可能な笑いしか存在しないのか、その出現頻度や通用する人間の特徴に注目して行われた調査はされていない。本稿はそれらを調査するため「20代の男子大学生はどのような事が起きた時に笑うのか」というリサーチクエスチョンを立てた。そしてそれらに当人の出身地域による違いは生まれるのか、あるとしたらどのような特徴があるのかを二次的に調査した。笑いの理論の進歩、そしてジョン・モリオールの3つの理論の新たな特徴の発見が目的である。

3 方法

3.1 一度目の調査

一度目の調査は2018年7月24日から2018年9月6日にかけて不定期に行われた。お笑いに関心のある同志社大学の大学生（関西出身，在住4人）や，東京都の住む高校時代の同級生ら（東京都出身，在住4人），計8人を対象にインタビュー調査を行なった。調査方法は半構造化インタビューを用い，対象者にプロの芸人のコント，漫才の作品4本を見て頂いた後，面白いと感じた点を挙げてもらい，その理由などをなるべく詳しく聞かせてもらい，内容はすべて文字起こしした。その結果を受けて，対象者の笑った理由がジョン・モリオールのどの理論と関係するか，もしくはどの理論にも当てはまらないものなのかを分析し，次に出身地域と笑う理由にどのような関係があるのかを調査する予定であった。

しかし，この調査は予想していなかった展開を迎える。以下，インタビュー内容を文字起こしたものを引用する。以下の発言をした対象者は一致しないためア)，イ)，ウ)，エ)で示した。

＊ ＊²⁾なんでそこが面白いと思った？

ア) え～，なんでだろう。難しいな～。単純に面白いと思ったから。じゃダメなん？

＊ ＊面白いと思った理由とか，説明できる？

イ) 言い回し？とかかなあ。なんか響きが面白いなって感じ。なんでその言い回しを面白いと思ったかは自分でもわからない。

＊ ＊あそこで笑ってた理由って，自分でわかる？

ウ) え，何で自分が笑ったか？えー，面白！ってなったからじゃない？

＊ ＊どんなものを「面白い」って思うん？

エ) そんなのわかんないでしょ。自分の中で面白いと思ったら面白い，じゃん？

上記はほんの一部のインタビュー内容を抜粋したものであるが，同様の内容のものが多く得られる結果となった。つまり，何かを見て笑う人の多くは自分自身がなぜ笑ったか，どのようなものをいかなる理由で「おかしい」と感じたのかを説明が出来ない，わかっていないという結果である。これ以上彼らが笑った理由を追求することは対象者にとってあまり好ましくない，インタビュー調査の雰囲気を壊しかねないと考えたため断念した。この結果は驚くべきものであり新たな発見であったが，本来の調査目的である，3つの理論の証明を行なう要素としては，残念ながら信憑性の低いものであった。この結果を踏まえ，やむを得ずリサーチクエスチョン，調査対象，質問項目を変更し，もう一度調査を行なった。

3.2 リサーチクエスチョンの変更

モリオールの3つの理論は，笑いはどのようにして生まれるか，という笑いの仕組みを説明したものである。上述した調査では，笑う人は，笑っている結果から察するに，対象に含まれるその仕組みを無意識に認識しているわけではあるが，どのような仕組みをおか

しいと思い、笑うことに至ったのかの具体的説明は難しいという結果であった。そこで逆の立場、つまり自らが意図して笑いの対象となる、また笑いの対象を提示している者にインタビューを試みたところ、人が何を面白いと思うのか、について有益な意見、考えが得られた。

モリオールの3つの理論が現代にどれだけ通用するものなのか、3つの理論で説明できない種の笑いの存在を問うという調査目的は一切変えずに、変更後のリサーチクエスションは「同世代の男子大学生はどのような方法を用いて人を笑わせるのか」に決定した。それに付随し、調査対象者の受けてきた地域文化と、人を笑わせるために用いる方法にどのような関係性があるのかも調べ。3つの理論の存在ももちろん知らず、過去の経験や環境の中で、笑いのメカニズムを覚え、現在も自分ではなく、人を笑わせる立場に立つことの多い者を調査対象として二度目の調査は行なわれた。

3.3 二度目の調査

調査方法は2018年9月16日から2018年10月31日の期間に、1対1の半構造化インタビューを採用し、筆者の自宅やカフェで約1時間にわたって行なった。その内容はすべて録音し、その後インタビュー内容を全て文字に起こした。

対象者は、人を笑わせた経験のある20代の大学生とした。優越の理論の説明にあったように、残酷で不愛想な面も時折見せてもらう必要のあるインタビューだと憶測したため、信頼関係のある友人7人を調査対象とした。なお、笑いを生み出す方法とそれに関する理論が対象者の受けた地域文化とどう関係するか調べるために、人が笑う仕組みを意識し始めた頃と関係の深い地域（以下「きっかけ」）をあらかじめ聞いた上でインタビューを行なった。対象者のプロフィールは以下のようになっている。

表2 調査対象者のプロフィール一覧

Aさん 年齢：23歳 性別：男性 出身地：東京都 居住地：東京都 きっかけ：東京都
Bさん 年齢：23歳 性別：男性 出身地：東京都 居住地：東京都 きっかけ：東京都

Cさん

年齢：24歳

性別：男性

出身地：静岡県

居住地：広島県

きっかけ：静岡県

Dさん

年齢：23歳

性別：男性

出身地：愛知県

居住地：愛知県

きっかけ：愛知県

Eさん

年齢：23歳

性別：女性

出身地：京都府

居住地：京都府

きっかけ：京都府

Fさん

年齢：21歳

性別：男性

出身地：京都府

居住地：京都府

きっかけ：京都府

Gさん

年齢：23歳

性別：男性

出身地：福岡県

居住地：滋賀県

きっかけ：大阪府

3.4 質問項目

インタビュー内容は半構造化インタビュー対象者によってそれぞれ異なるが、調査目的を果たす上で必要な結果が得られた質問項目をまとめた。

Q1. あなたは目の前の人を笑わせようと思うとき、どのような方法を使いますか。

- Q2. なぜその方法を使いますか. あなたの笑いに関する考えも含めて教えてください.
- Q3. 人を笑わせる際に使わない方法と, その理由を教えてください.
- Q4. あなたが他人を意図的に笑わせた, 具体的なエピソードを教えてください.
- Q5. いつから人を笑わせることを意識し始めましたか.
- Q6. 人はどのような時に笑うと思いますか.
- Q7. 笑わせようとしたにも関わらず, 相手が笑わなかったエピソードを教えてください.
- Q8. 笑いに対してのあなたなりの意見を聞かせてください.

これらの質問の狙いは, ただ単純に対象者がどのようなことで人を笑わせるのかを具体的にするだけでなく, 対象者の周囲の人間がどのようなことをおかしいと思って笑うのか, そしてその理由を知っている対象者は何を考え, 行動し, 周囲の人間を笑わせているのかを調査することにあつた. 上記の質問事項の中からリサーチクエスチョンに関連付くものとその解答を抜粋し考察を行なった. インタビューでは対象者が著者を笑わせる場面が何度もあるほど, 対象者たちの笑いを生み出すことへの高い意識や, 会話を楽しんだうえで相手を楽しませる姿勢が多々見受けられるものであつた,

4. 結果と考察

4.1 分析方法

インタビューしていく中で出てきた対象者たちの「人はなぜ笑うと思うか」に対する発言を抜粋し, それらがモリオールの唱えた優越の理論, ズレの理論, 放出の理論のどれに当てはまるものなのか, もしくは3つの理論のどれにも当てはまらないものなのか4つに分類した. 並列してそれぞれの理論によって説明される笑いに対する対象者たちの意見も引用した. そしてその結果からわかった現代における各理論の特徴, 対象者のきっかけとなった地域との関係を分析した.

結果と考察に入る前に, 本稿における分類の判断基準, どのような発言をどの理論に当てはまるとしたのか, またはどれにも当てはまらないものとしたのかを説明する必要がある. 上述した「2.2 ジョン・モリオールの3つの理論」と重複する点が多いが了承していただきたい.

・優越の理論に当てはまるとした判断の基準

対象に向けての軽蔑, 侮辱から生じる笑い, 端的に言えば嘲笑を説明した理論. 他人の欠点や失敗を指して優越感を持って発する笑いという特徴を踏まえ, 「失敗」「軽蔑」「優越感」「悪意」「嘲笑」「滑稽」「弱み」「侮辱」「見下し」「からかい」「バカ」「いじり」といったキーワードが入ったもの, またこれらのキーワードが入っていても笑っている人がその対象を見下しているイメージを含むものを優越の理論に関係していると判断した.

・ズレの理論に当てはまるとした判断の基準

予期したことと実際に起きたこととの不一致が生み出す笑いを説明した理論. 秩序のある世界で生きてきたわれわれの中に無意識としてある事物や出来事に対する一定のパター

ンが知覚した対象に合致しなかった際に起こる。一見優越の理論との区別が難しいがこの理論は対象を見て笑う人の中に概念的理解があることが重要である。話のオチ³⁾などで起こる笑いもこの理論によるものである。よって、「予期」「予想」「普通」「一般的」「不一致」「意外性」「裏切り」といったキーワードの入ったものや、受け手の予想と違ったものを狙って生み出されるものを、ズレの理論に関係していると判断した。

・放出の理論に当てはまるとした判断の基準

高まった緊張が不要となったときに蓄積されていたエネルギーが開放、放出されることで起こる笑いや、何かしらの力で抑圧、禁止されていたものが破られた際に起こる笑いを説明した理論。どこかにある緊張状態と、本来いけないとされているもの、好ましくないとされていることを表出することで得られる快感が特徴である。「緊張」「抑圧」「禁止」「危険」「タブー」「発散」「性的ジョーク」「毒舌」「怒り」といったキーワードの入ったもの、少なからず、本来あってはならないこと、という意が含まれたものを放出の理論に関係していると判断した。

・3つの理論のどれにも当てはまらないものは上記の3つの理論のどの判断基準にも当てはまらないものを挙げた。

4.2 考察

以下、3つの理論に関係するもの、どれにも関係しなかったものについて、どの対象者が、どの質問において、どのような発言をしたのかをわかりやすく表にまとめた。そしてその結果を受けて新たに判明した傾向、特徴を挙げ、理論ごとに考察を行なった。

(1)優越の理論に関するもの

表3 優越の理論に関する発言

対象者	発言
Dさん	Q1. あなたは目の前の人を笑わせようと思うとき、どのような方法を使いますか。 自虐が多い。自分は顔も格好良くなくて、頭も悪い事を周りの人にわからせた上で、偉そうなことを言う。「お前が言うなよ」って誰かに言われて笑い取ることが多い。笑われにいつてるね。
Eさん	Q1. あなたは目の前の人を笑わせようと思うとき、どのような方法を使いますか。 自分を下げる自虐エピソードを話す。バカにされに行く、って感じかな。この前私こんなバカな事しちゃってさ～hhh ⁴⁾ 、みたいな。やっぱ人の弱みを見て笑うことって自分もよくあるし。
Fさん	Q1. あなたは目の前の人を笑わせようと思うとき、どのような方法を使いますか。 相手が初対面の人の場合、相手の事を持ち上げつつ、自分を卑下することが多いですね。そうすると空気が和んで、笑いが起きやすくなるので。逆に親しい仲の友達とかとの間では誰かをバカにすることが多いです。バカにするって言い方悪いけど、まあいじり笑ってやつです。人ってどっかでやっぱ相手のことを

	バカにして笑ってるとは思いますね. 上の者が下の者を笑うみたいなの.
Gさん	Q1. あなたは目の前の人を笑わせようと思うとき, どのような方法を使いますか. 「バカだな」と思われに行く. 変な声を出したり, 変な顔をしたり, 自分の失敗談を語ったり. 一回周りから見下されるポジションになれば, 笑いをとるのはすごい楽なんよ. 何をやっても「またバカが何かやってるよ hhh」って笑ってもらえる.

Dさん, Eさん, Fさん, Gさんの4人は自分が何かを見て笑うときもどこかでその対象を見下している, という認識があるゆえに自虐などの方法を用いていた. この4人のうち3人(Eさん, Fさん, Gさん)は関西地方に馴染みがあり, きっかけも関西地方であった(EさんFさんは京都出身在住, Gさんは大阪に3年間在住経験あり). 一方で生まれも育ちもきっかけも関西地方ではないAさん, Bさん, Cさんのインタビューでは以下のような結果になった.

表4 優越の理論による笑いに対しての否定的な発言

対象者	発言
Aさん	Q3. 人を笑わせる際に使わない方法と, その理由を教えてください. うーん, あんまり他人をバカにするような笑いは好きじゃないしやらないかなあ. 自分自身が背も低くて太ってるっていうコンプレックスの塊だからね. なんかその笑いはリスクがある感じがする. テレビでもよく誰かをいじり倒したりするのよく見るけど, あんまり笑わない. ちょっとかわいそうとか思っちゃう. 度が過ぎてなければまあ多少面白いなーって思うくらい.
Bさん	Q3. 人を笑わせる際に使わない方法と, その理由を教えてください. ちょっとどこかでバカにされたくない自分がいるからだと思うけど, 体張って笑い取ったりはしないなあ. 笑わせてるよりも笑われてるって感じがして. 誰かをバカにして笑いを取ることはあるけど, それも正直好き嫌い分かれる笑いではあるから, あんま使わないね. 本当に仲の良い人との間でちょっとやるくらい. やり過ぎると嫌われそうじゃん.
Cさん	Q3. 人を笑わせる際に使わない方法と, その理由を教えてください. 人が傷つく笑いはあんま好きじゃないからやらないねえ. 万人受けしないし, やっぱ申し訳なさとか感じちゃうもんね. バカにするのもされるのも, 自覚はないけど抵抗があるのかも.

以上のように, Dさん一人を除いては, 優越の理論によって説明される笑いに対する印象は, 関西地方に馴染みがある人間かそうでないかで, 明確に肯定派と否定派に分かれた. この原因には, 井上宏(2003)によって述べられた東京と大阪の笑いの違いが関係している可能性がある.

優越の理論によって起こる笑いに対する否定的な態度を示したAさん, Bさん, Cさんはその態度の理由として, 笑われることへの抵抗, その笑いをういた結果の自分の見られ方を挙げており, これらは井上(2003)のいう「縦社会」の影響との関連を示している. 一方で優越の理論による笑いを頻繁に日常生活に用いるDさん, Eさん, Fさん, Gさんの特徴とし

では、無意味に見下され、笑われにくい姿勢を取るわけではなく、その後に相手と築くであろう関係性を良好にするためであったり、その場の空気を和ませるためであったりという、何らかのポジティブな目的があることが伺えた。2018年に比治山大学の塚脇涼太が行なった、攻撃的ユーモアの持つポジティブな対人的機能の検討調査⁵⁾の結果では、相手との親密度が高い場合に、攻撃的ユーモアは面白おかしい発話であると強く認識され、ポジティブな過程の影響力がネガティブな過程の影響力を上回ることによって、肯定的感情を生起させることが明らかにされている。これらの結果も井上(2003)のいう「横の関係」が今日の関西に未だ名残がある可能性を示したものである。

優越の理論は、社会条件が大きく変化した現代においては、ホップズの生きた時代ほどの残酷さや悪意を含むものではなく、コミュニケーションを円滑に進めるための手段というほどに形態を変えてはいたが、〈バカにする〉〈いじる〉といった攻撃性の低い程度で通用していた。そしてそこにはかつての東京と大阪の社会状況との関係性が見られた。この理論によって説明される笑いは、関西地方の地域文化に馴染みのある人には肯定的感情を抱かれる可能性が高いという新たな特徴を今回の調査で得ることとなった。

(2)ズレの理論に関するもの

表5 ズレの理論に関する発言

対象者	発言
Aさん	Q1. あなたは目の前の人を笑わせようと思うとき、どのような方法を使いますか。正解じゃないことを言う。皆が思ってる正解をどう裏切っていくか。その意外性で笑いが起こってるんだと思う。「一般的に考えておかしいでしょ」みたいな。
Bさん	Q2. なぜその方法を使いますか。あなたの笑いに関する考えも含めて教えてください。 笑って一種の違和感から生まれるもので、一般的に見たらそれ変だよ、ってことを言ったりやったりしてるわけじゃん。だからエピソードトークとかを話すときは、「これこの後こうなるんだろうな～」を思わせておいて、そこからどう外していくか、を考えてる。普通の人だったらここでこう言うだろうな、じゃあ違う言い方しようとか、やっぱ考えながら話してるところはあるよね。
Cさん	Q1. あなたは目の前の人を笑わせようと思うとき、どのような方法を使いますか。めっちゃ爆笑してて急に真顔になるとか、その落差を利用して笑わせる。

ズレの理論による笑いをを用いる対象者は3名だけであり、興味深いことに優越の理論による笑いに否定的感情を抱いていた3名であった。この理由は先に記した「縦の社会」の影響にある。そしてこの方法を使って笑いを起こす理由としては、「誰も傷つけない笑いだから」という意見が多かった。優越の理論とは真逆の印象をズレの印象に抱く彼らの口からは、ただ単に相手の予想を裏切るだけでないという、過去の間人関係やバラエティ番組を見るなかで身につけた笑いを起こすコツや苦悩を沢山聞くことができた。彼らのズレの理論に関する発言をまとめてみると、ズレの理論による笑いに種類が存在することが明らかになった。それが判明したのは、対象者の過去の体験談を聞いている時であった。特にその中でもAさん、Bさんの二人がインタビューの中で話した内容が非常にわかりやすく、

笑いの仕組みに具体的に言及していたため、二人のものだけ引用させて頂く。以下、インタビュー内容を文字に起こしたものである。

A さんの場合

**その、「正解じゃないことを言う」って方法を使って、笑いを取った過去の具体的な場面とかある？

A えーっとね、この前普通に友達数人と歩いてて、野良猫が何匹か目の前を通過したのね。それを見て、「うわ、犬いるじゃん」て俺が言ったら、そしたら「猫ね」って誰かが突っ込んで、笑いが起きた。

**そこにはどういう意図があって、皆が笑うだろうなと思ったの？

A すごい細かく話すと、まず、自分が猫を見つける、んで、一緒にいる友達も猫を見ていることを確認する。その時点で、友達の前の中にはたぶん「あ、猫だ」っていう感情があるわけじゃん。そこでもし俺が「猫だ」って言っても皆も思ってることだから「そうだね」で終わる。笑い取るには猫っていう皆の前の中にある正解以外のものを言わなきゃじゃん。だから、そのあと誰かに「猫だよ」って訂正されることを期待した上で、「犬いるじゃん」って言う。

**そこが「犬」になる理由は？猫以外だったら何言ってもウケるってこと？

A あ、それは違うね。やっぱり正解とどこか似てないといけない。たとえばその猫を見たとき俺が、まあ、なんでもいいんだけど、「あ、スマートフォンだ」って言ったとしても周りの友達は俺が何を指して言ってるのかわからなくて混乱するじゃん。だからそこで猫に似てるもので且つ、皆が知ってるものだよ。皆が知らないものの名前叫んでも皆「？」てなるし。4足歩行、ほ乳類、シルエットが似てる、けど、同じではない「犬」を選んだんだと思う。「あ、こいつ猫を見て犬と間違えるボケを言ったんだな」ってしっかり周りにわからせるため。でもこの笑って、俺の発言をあとで訂正する人待ちなんだよね。誰も反応してくれないと俺が本気で猫を犬だと間違った人だと思われる。まあ、思われなくとも思うけど。誰かがそのあと「猫だよ」っていうことで俺のボケが際立つじゃん。一見わからなかった人も、「あ、そういうボケね」って笑う。

**それ以外に、皆の思ってる正解を裏切る場面である？

A うーんとね、必ずしも正解が必要じゃなくて、明らかに間違ってることであればいいと思う。大学生がよく使う数字盛ったりとかもそうじゃない？

**どんなの？

A 「ここまで電車賃結構かかったわ」「いくらかかったの？」「8万円」「嘘つけ！」とか。

これってさっきの猫の話と違って、受け手は電車賃が実際はいくらかかったかっていう明確な正解は知らないじゃん。でも明らかに普通に考えて8万円は高すぎる。間違ってると思うから笑うんじゃないかな。

B さんの場合

＊＊その違和感,相手の予想から外れたことをする方法で,具体的なエピソードある?
B 飲み会とかで「この前こんなことがあってさ～」て話し始めて,話のオチ見当たらなくなって「いや,特にオチはないですけど」とか「誰かこの続きお願いします」って言うのとか.話し始めたからには周りは話の終盤に「オチが来るだろうな」と思ってるわけじゃん.とんでもなく面白いオチがある場合は別だけど,予想外の展開に持っていくと笑ってもらえるよね.「いや,なんもねえのかよ!」って.

友人関係や,相手の行動があって初めて形として成り立つような笑いを紹介してくれた.笑いを引き起こすのは概念的な理解と知覚とのミスマッチである,としたショーペンハウアーや,「予期したことと実際に見ることのあいだに生じる驚くべき不釣り合い以上に笑いを生み出すものは何もない」としたパスカル(=1995)の発言をもとに分析するとAさんの電車賃の話とBさんの内容はだいたい合致する.しかし一方でAさんの猫の話は,相手に予想させている点ではズレの理論であるが,成立するために下線部のような最低限の条件が必要とされているためにズレの理論と決定しがたい.下線部1の条件はモリオールの滑稽さのテクニックで説明できる.彼は,ユーモアにはわれわれの日常的な思考および予期パターンのかく乱,あるいはリアリティ図式の動揺が含まれていると考えた.たとえば喜劇のモノログや演技のように,ユーモア刺激を継続的にあたえつづけようとするものにはいつでも,観客のリアリティ感覚をたもちうる雰囲気維持することが必要になる.ユーモアの語り手が失敗するのは,ときとして逆説的にも,何もかもを滑稽なものにしてしまおうとするからであるという.(モリオール 1995: 152)

対象物との共通点を保つ理由は受け手にリアリティ感覚を持ってもらうためであり,これはズレの理論のユーモアを起こすための技術なのである.また,ズレの理論を唱えたうちの一人,スペンサーはズレの理論による笑いを説明したあと「このような笑いが自然に起こるのは,重大なことに気をとられた意識が些細なことに向かうとき,すなわち,弱まった不一致と呼ばれる場合だけである」(=2011)と述べており,リアリティ感覚の重要性との関連を示している.下線部2に関しては,各学者の解釈に合意が無いがゆえに定義が難しかったズレの理論を唱えた人物の1人,サルスによる考えとの関係がある.

サルスは不一致(ズレ)理論に拡張を提案しており,不一致がたんに検出されるだけでなく,理性によって解決されてはじめてユーモアが生じるのだというのがその主張だ.この不一致解決理論によれば,不一致はある物語の設定とオチのあいだに存在している.解決が起こるのは,論理規則にしたがって心がその設定からオチが導かれるような筋道を見つけたときであり,その解決策がみつかったときにぼくらは笑うのだという.(片岡 2015: 88)

つまり下線部2の「あとで訂正する人」というのは,Aさんの起こした不一致に解決策を提示する人物であり,周りの人間がズレを認識し,理性によって解決するための役割を担っている.しかしAさんの話はズレの理論との関係に違和感を覚える.その理由は概念的な理解と知覚が引き起こされる順番が逆転しているためである.本来のズレの理論は受け手側が知覚する前に自分の中で概念的な理解やそれに関連した予想を立てるが,Aさんの例はまず対象の知覚が起きている.そしてその対象を認識した後にその対象を指しながら,

対象の概念的な理解から外れたものを受け、対象とつなぎ合わせるという順である。この現象は成立条件を多少もちいるものだが間違いなくズレの理論による笑いであり、この発見は本調査の成果と言える。

一方で優越の理論同様に、自分の用いることのない笑いとしてズレの理論を挙げた対象者からも、新たな発見につながる発言がうかがえた。

表 6 ズレの理論による笑いに対しての否定的な発言

対象者	発言
Eさん	Q3. 人を笑わせる際に使わない方法と、その理由を教えてください。 言い間違える系とか、あんまり面白いと思わないし、笑わない。なんでか自分でも理由はわかんないけど。
Fさん	Q3. 人を笑わせる際に使わない方法と、その理由を教えてください。 間違ったことをわざと言って起こる笑いあると思うんですけど、なんか僕は苦手ですね、というか下手ですね。あんまウケたこともないし。面白いとは思いますが。でもなんか誰か笑わせる時に使うかっていうと、ちょっとハードルを感じます。難しいですよあれ。

関西出身、在住の2人によるものであるが、これらは九州大学大学院人間環境学府が行なった関東と関西で見られる人同士のやりとりの違いにおける調査結果⁶⁾である、「関西人は関東人よりも、コミュニケーションの中で良好な人間関係を築くために他人に自分の失敗談を頻繁に話す」(2007)ということと、先に記述した過去の経済携帯によって生まれた地域文化差に起因する。関西人に無意識のうちに優越の理論への得意意識、それ以外の笑いへの苦手意識、多少の抵抗を抱かせたといえる。

(3) 「放出の理論」に関するもの

表 7 放出の理論に関する発言

対象者	発言
Bさん	Q4. あなたが他人を意図的に笑わせた、具体的なエピソードを教えてください。 本来いけない事だけど、仲の良い先輩に敬語を使わず、タメ口で話す。「おい、先輩だぞ」と本人に言わせて、笑いを誘うことがある。
Fさん	Q4. あなたが他人を意図的に笑わせた、具体的なエピソードを教えてください。 ちょっと周りの人達が触れていいのかわからないようなこと、タブーとか、失礼に当たるようなことを、言っちゃう。そうすると、「あ、それ言っちゃうんだ」で皆笑うと思うんです。怖いんですけど。
Gさん	Q4. あなたが他人を意図的に笑わせた、具体的なエピソードを教えてください。 高校時代とか、先生の話が長いときとかに、先生に聞こえないくらいの声量で「話長いぞ」とか言う。あと、すごい空気が張り詰めてる時、こっそり変な顔したり、ふざけたりする。

放出の理論は優越の理論、ズレの理論と違って対象者に特に共通点は見当たらず、関連する発言の出現率も、他の二つの理論に比べてかなり低く、以上のものしか確認できな

った。その理由としては、この放出の理論によって生まれる笑いが、何かが禁止されている空間や、タブーが存在する中で起こるといった特徴であるために、笑いを生み出すことや、笑うことにリスクがあることが挙げられる。そして何よりも調査対象者の現在の生活環境である大学、サークル、バイト先といった空間が、放出の理論を生み出しにくい、緊張状態になる頻度の少ない空間が多いことが原因としてインタビュー内容に示された。しかしこの結果を受けて、現代に放出の理論による笑いの出現率が低い、と結論付けてしまうのは危険である。なぜなら本調査の対象者と質問事項を見ればわかる通り、これらのインタビュー内容で聞いたものは本人たちが意識的に生み出しているもの、人が笑う理由として考えている笑いの種類しか取り上げられないからである。対象者が放出の理論の笑いが目の前で発生した場合、ある緊張状態から、その緊張が無へと転化する場面に立ち会った場合、面白いと思うかはまた別問題なのである。つまりここからわかるものは、今の20代の大学生が意識してユーモアを生み出す際に、放出の理論による笑いは、優越の理論、ズレの理論のそれに比べて用いられることが少ないということである。少なからず形態も変えずに放出の理論は現代に通用するものであり、他の2つの理論と違って地域文化の影響を受けないものであることが調査目的に沿った結果である。

(4) 「3つの理論のどれにも当てはまらないもの」

表 8 3つの理論のどれにも関係しない発言

対象者	発言
Bさん	Q2. なぜその方法を使いますか。あなたの笑いに関する考えも含めて教えてください。 理想の笑いとして俺の中にあるのが、「認識してないけど、言われたらそうだね」ってなる笑い。昔誰か芸人が話したエピソードトークで、「女の方は、年齢を聞かれるのを嫌がるくせに、毎年誕生日を祝ってもらいたがる」って話を聞いて、衝撃を受けたのよ。案外皆気付いてないけど「あ、確かにそうだわ」ってなるじゃん。これは結構俺の中で意識してることで、面白い事を言おうとする時に、まず皆に共感してもらえるかどうかを考える。話した後「あー、確かに」と相手に思わせると、笑いが起きることが多い。面白い例えとかがウケてる理由もそれだと思う。どこかで「わかるわ〜」って共感してるから笑うわけで。
Dさん	Q2. なぜその方法を使いますか。あなたの笑いに関する考えも含めて教えてください。 周りの期待を裏切るとは絶対にしない。「こういうボケ来るだろうな」と相手に思わせておいて、そのボケをそのままする。「ほら、やっぱり！」って皆が思っただけで笑う。もちろん互いの距離が近くないと成り立たないけど。吉本新喜劇でもあるじゃん。有名な一発ギャグが出たら笑うみたいな。「あのギャグそろそろ来るぞ」って皆期待してるわけじゃん。あれと一緒に。
Eさん	Q3. 人を笑わせる際に使わない方法と、その理由を教えてください。 日常生活の中でよく見かける人を誇張したりする。「うわ〜わかる、そういう人いるわ〜hh」って笑ってもらえる。
Fさん	Q2. なぜその方法を使いますか。あなたの笑いに関する考えも含めて教えてください。 笑って共感からくるものだと思うんです。「わかるわ〜」とか「確かに」って思

いが、笑ってる人にはある。モノマネとか、あるあるネタがウケてるのも同じ原理だと思うんです。だから僕は、「皆が思ってるけど、意識してないこと」をよく言います。思ってるけど思いついてないこと、ですね。たとえば髭が濃い友達がいたりして、別に今まで誰もそのことを指摘してなかったけど、あるとき「お前、髭濃いねん！」って言ったり。そしたら、「あ、言われてみたら確かに前髪濃いな hh」って周りが笑う。

これらは笑う対象を見下している優越の理論でもなければ、相手の予想を裏切るズレの理論でもなく、緊張した場面でそれを無にする放出の理論でもない。3つの理論に当てはまらなかった笑いに共通していることは〈相手の共感と呼ぶ笑い〉であった。相手の予想を裏切ることで成立する笑いを理論化したズレの理論とは一見真逆のようにも見えるものである。しかしこの笑いは多少、ズレの理論の要素を含んでいる。その印象を生んだインタビュー内容が以下である。

**その、皆が思ってるけど意識してないことで、たとえばどんなことを言って笑い取る？

F たとえば、友達のSさんってのが、見た目は細いけど、ちょっとお腹は出てるやつがいるんですよ、周りの友達はたぶんそれを知ってるけど、誰も言ったことが無い。別に指摘したらかわいそう、とかそういう理由じゃなくて。だから「お腹出てね？」っていうと皆「確かに」ってなって笑うんです。

ズレの理論を提唱したショーペンハウアーは、「ユーモアが起こるのは、外界の知覚が突然にぼくらの誤解含みの先入見を訂正したときである」(Schopenhauer=1995)としている。上の例に当てはめるのであれば、Sさんのお腹を初めて見た周りの友達は、自分の中での誤解を含んだ先入見が否定された経験をしている。しかしそこには自覚がないのだ。自覚があればFさんの発言が出ずとも笑っている。Fさんの発言により、過去の自分の中に生まれたズレを初めて自覚し、思い出し、笑うのである。インタビューによく出てきた「言われてみれば確かに」という言葉は、具体的に説明すれば「言われてみれば確かに私はそのことにズレを感じた過去があった」なのである。また、自覚がないという理由以外にも、笑いの持つ社会的な性質から考えられる理由がある。モリオールはこう語る。

われわれは、もしそこに他人がいたならきっと笑ったであろう事柄でも、ひとりだとめったに笑わない。またわれわれは、集団のなかにいるとき何かに笑っているのが自分ひとりだけだと気づくと、ふつうは口を手でふさぎ、すくなくともほかのひとが笑いにくわわってくれるまでは笑いをこらえようとする。

どんな理由でもいい、たとえひとつのちょっとしたバカバカしいことでもかまわない。何かを他人と一緒に笑えば、そのひとと多少なりとも親密になることができる。実際、笑っている当人たち自身がユーモアの対象なることもあるが、その場合でもこのような統合効果を発揮する。(モリオール 1995: 207-9)

つまり笑いの持つ社会的性質から考えれば、Sさんのお腹を見て笑わなかった友達は、

他人とそのズレを共有できなかったためである。そしてあとにFさんという他人がそのズレに対する認識を代表して発言に乗せることで、友達は、ズレを感じていたのは自分だけではなかったという安心から初めて笑うのだ。

3つの理論のどれにも当てはまらなかった笑いは、ズレの理論における〈ズレ〉を、対象を見た瞬間的にでなく、他人に指摘されることで初めて認識するという例であり、そのズレへの認識を他人と共有できることがわかったときに起こる笑いであった。梅原猛はズレを「取り違え」と表現し、「取り違えを引き起こした原因は客観的原因にもよるが、同時にそれ以上、主観的原因によるのであろう。私には事象を正しく見る精密な眼が欠けていたのだ。人は私を笑うだろう。」(1972)と述べている。つまりこの笑いはズレに気付いていなかった自分を笑っているケースとも考えられる。この笑いは人と対象のみで成り立つ3つの理論とは違う、他人との共感を必要とする笑い、〈ズレへの気づきの理論〉〈ズレの共有の理論〉と名付けられる。ズレの理論と近い特徴は持つが、この理論の発見は本調査最大の成果である。

5. 結論

5.1 まとめ

以上のように、筆者の考察から見えてきたものは、昔から信頼を置かれていた代表的な3つの笑いの理論は、多少ニュアンスを変えながらも現代にも通用しており、地域文化の影響を受けているものもあるということだ。そしてその3つの中でもズレの理論は特に多様化を果たしており、今日の日本の大学生の周囲の環境では頻出するものと考えられる。3つの理論に当てはまらなかった笑いに限らず、第4章の結果における文字起こしの引用を見ても分かるように、現代の笑いにはどれも他人との共感が必要条件と考える。優越の理論には互いの親密な関係性や、場の雰囲気や相手と共有する必要がある。ズレの理論はズレであることを相手と共有する必要がある。放出の理論はその場の緊張度を相手と共有する必要がある。そしてユーモアの社会的価値である、コミュニケーションを円滑にする働きは、今では多くの人々のあいだで共有されていることがインタビューの文字起こしからもわかる。他人との関係を築くうえでユーモアはよりいっそう必要とされる時代なのである。

5.2 今後の課題

今回の調査は20代の大学生を対象に、人から笑いを取るとき、どのような方法を使うのか、そしてその裏側にある意図を具体的に述べてもらい、笑いの理論と結びつけたが、これらはいくまである程度距離感が近い人と人とのあいだで起こりやすい笑いに限定されている。一度目の調査のリサーチクエスチョンである、「20代の大学生はどのような事が起きた時に笑うのか」は笑いの対象とそこにおかしさを感じる理由を明確にするためのものだっただけに、笑いの理論との関係性は、二度目の調査のリサーチクエスチョンよりも高かった可能性は否定できない。今後、笑いの理論に直結する調査を立案し、信憑性の高い結果を得ることに努めたい。

〈注釈〉

- 1) 吉本興業が主催する漫才のコンクール。朝日放送テレビ(ABC)が制作し、テレビ朝日系列で放送を行なっている。
- 2) インタビュー調査の中で著者の存在を表す表記。
- 3) 笑い話など物語の結末のこと。多くの場合おかしみのある部分。
- 4) インタビュー調査の中での笑い声を示したもの。
- 5) 塚脇涼太, 2018, 「攻撃的ユーモアはポジティブな対人的機能をもつのか:相手との親密度と攻撃的ユーモアの攻撃度からの検討」13-18
- 6) 丹羽空・加藤和生, 2007, 「人とのやりとりにおいて、関東と関西とでは違いがあるのか」

〈参考文献〉

- Aristotle, Nicomachean Ethics (=1988, 加藤信朗訳『ニコマコス倫理学』岩波書店.)
- Aristotle, Problems (=1988, 戸塚七郎訳『問題集』岩波書店.)
- Erasmus, In Praise of Folly, trans. Hoyt Hopewell Hudson. Princeton: Princeton University Press, 1941. (=1954, 渡辺一夫訳『痴愚神礼讃』岩波文庫.)
- Eric Smadja, 1993, 2007, Le rire (Collection QUE SAIS-JE? N° 2766) (=2011, 高橋信良訳『笑い—その意味と仕組み』白水社.)
- Freud, Sigmund. ” Humor”. Collected Papers, vol 5. New York: Basic Books, 1959. (=1969, 高橋義孝訳『ユーモア』人文書院.)
- 井上宏, 2003, 『大阪の文化と笑い』関西大学出版部
- JOHN, MORREALL, 1983, TAKING LAUGHTER SERIOUSLY (=1995, 森下伸也訳『ユーモア社会をもとめて—笑いの人間学』新曜社.)
- Matthew M. Hurley, Daniel C. Dennett, and Reginald B. Adams, Jr, 2011, INSIDE JOKES: Using Humor to Reserve-Engineer the Mind (=2015, 片岡宏仁訳『ヒトはなぜ笑うのか—ユーモアが存在する理由』勁草書房.)
- Michael Billig, 2005, LAUGHTER AND RIDICULE: Towards a Social Critique of Humor (=2011, 鈴木聡志訳『笑いとは—ユーモアのダークサイド』新曜社.)
- 丹羽空・加藤和生, 2007, 「人とのやりとりにおいて、関東と関西とでは違いがあるのか」九州大学心理学研究. 第8巻 91-107
- 塚脇涼太, 2018, 「攻撃的ユーモアはポジティブな対人的機能をもつのか:相手との親密度と攻撃的ユーモアの攻撃度からの検討」対人的コミュニケーション研究. 第6号 13-18
- 梅原猛, 1972, 『笑いの構造』角川選書.